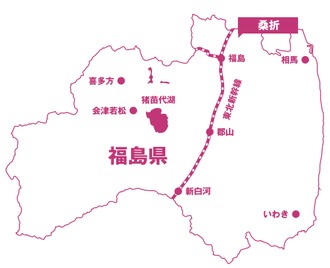
誠実転じて桃、実る

7月1日
32℃

特集 白桃



【福島県桑折町大字谷地字石近】

文＝高橋 博之　現地調査＝成影 沙紀　写真＝玉利 康延、黒田 知範

「待ち合わせは蕎麦屋で」。そう言われて向かったのが福島県桑折町、国道 4 号線沿いに店を構える蕎麦屋「翻°久里亭」（ぽんぐりてい）。店に入ると右奥にガラス張りの蕎麦打ち場があり、背の高い青年が丁寧にのし板の上を片付けていた。約束していた桃農家が現れるのを待っていると、額の汗をぬぐいながら「どうも」と腰をかがめてその青年が近寄ってきた。この人こそ今回の主役、はねだ桃園の三代目、羽根田幸将（ゆきまさ）さん（28）だ。

桃を売る少年

はねだ桃園は初代の故・祖父幸一さんの代から、飲食店と農家を兼業してきた一風変わった農家だ。祖父は米や野菜もつくる農家だったが、「米と野菜があるなら新鮮な食べものを地域のみなさんに提供できる」と、ドライブイン「ぽんぐり」をオープンした。ちなみに「ぽんぐり」とは松ぼっくりの方言で、山から松ぼっくりがコロコロと転がって麓に集まってくるようにお客さんが集まってきてくれれば、という想いが込められている。祖父が始めた食堂を父が引き継ぎ、洋食屋、蕎麦屋と中身を変えてきた。

祖父は型破りな人だった。農家をしながら食堂を始めるにとどまらず、仙台の朝市の盛り上がりから着想を得て、自分の桃を売る直売所を近所の国道沿いに建てた。一ヶ所だけでは通り過ぎてしまうからと、さらに二ヶ所にテントを張って直売所をつくった。国道を走る車は、信号 4 つ分の道のりをはねだ桃園の誘惑に打ち勝たねばならなかった。

幸将さんは男ばかりの 4 人兄弟の次男として生まれた。朝 5 時に起きて収穫を手伝い、それが終わるとラジオ体操に行き、そのまま直売所で店番をしながら宿題をするというのが羽根田家の夏休みだった。当時の幸将さんを振り返って、母は、「シャイな子でね。お客さんにいらっしゃいませ〜！って言うのは他の子の方がうんと上手かったんです。ゆっちゃんは後ろで黙々と箱をつくっているようなタイプ。だからまさか、ゆっちゃんが家業を継いでこんな風に接客するとは夢にも思いませんでした」と語る。そんな一番家業を継ぎそうになかったゆっちゃんが、なぜ桃農家になったのか。

帰郷

「いつから？と聞かれるとわからないんですが、子どものころから職人に憧れてたんです」と幸将さんは言う。機械では決してできない、自分の手を使ってものをつくるということがしたかった。小学生のときには書道に打ち込み、やがて絵画に目覚めた。高校卒業後は美術教員を目指して山形大学に入学。彫刻を専攻し、教員免許を取得した。4 年生のとき、山形市少年自然の家でのキャンプイベントの手伝いをしたことがきっかけで、少年自然の家に就職。その後も教員採用試験を受けるが、3 年連続で不採用となった。2015 年、4 回目の採用試験を迎える。東日本大震災と福島原発事故から 4 年目の年だったが、幸将さんの人生は激烈な変化を迫られることになる。

これでダメなら諦める、と挑んだ試験の合否が発表された。結果は不合格。直後に、父に胃がんが見つかり、余命 3 ヶ月と宣告された。兄弟 4 人はすぐに集まって、家族会議を開いた。当時、幸将さん以外の 3 人は福島県内で働いていたが、「どうする？」とみんなに聞くより先に「俺がやる」と言った。4 年にわたる夢への挑戦、そして急に実家に戻って家業を継ぐという選択。それを支えてくれたのが当時付き合っていた彼女だった。彼女は同じ大学の後輩で、「好きなことしたらいいよ」といつも背中を押してくれていた。

父は胃の 3 分の 2 を摘出する難しい手術に奇跡的に成功し、半年の休養を経て畑に戻った。翌年の春、幸将さんは故郷に戻り、実家の桃づくりをしながら、福島県の果樹研究所で 1 年間果樹栽培を学んだ。山形で働いていた彼女とは遠距離恋愛になったが、自分が育てた桃ができるのが嬉しくて、育てている十数種類の品種の桃をすべて、10 日ごとに彼女の両親に送った。その度に「おいしかったよ、ありがとう。よくがんばってるんだね」と電話がきたことがこの上ない喜びだった。農業とはモノをつくるのがゴールではなく、その先の食べる人の幸せがゴールなのだと感じた。

フクシマ産

幸将さんが戻ってきたとき、畑は 6 反歩ほどしかなかった。震災前はこの 3 倍あったが、あまりの風評被害の苛烈さに、父は農地を手放していたのだ。福島第一原発から約 66km 離れた桑折町にも爆発に伴う放射性物質が降った。